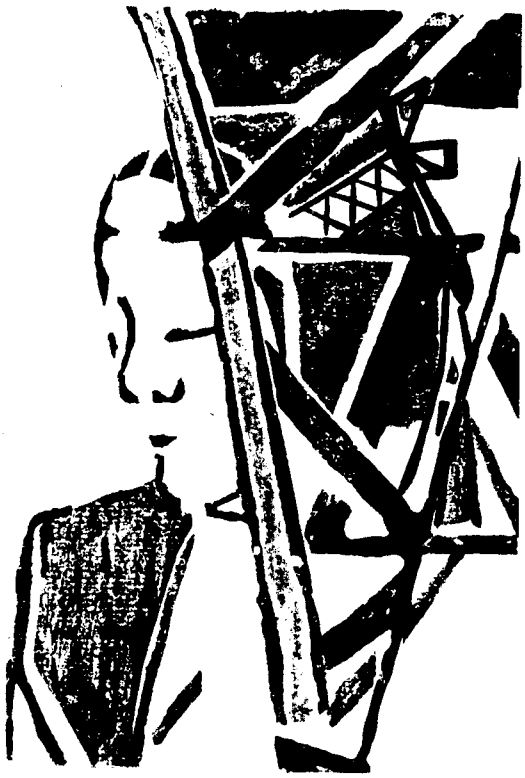
うとう

協和うとう会三十周年記念誌

うとう



協和うとう会　三十周年記念誌

表紙　題字・加藤辨三郎氏（故人）
カット・高橋孝夫氏（会員）

ごあいさつ／新井　純 …… 2
協和うとう会三十周年を祝して／中村寛之助 …… 3
みんなで語った「わたしの謡一徳」 …… 4
協和うとう会のあゆみ／磯部　武夫 …… 18
資料・協和うとう会三十回の記録 …… 33
資料・第一回～三十回素謡の上演曲目と回数 …… 34
資料・第二十一回～三十回の番組 …… 36
面打ちに魅せられて／松田　重久 …… 14
小屋主奮戦記／水原一瓢 …… 28
勤め人と趣味／西村　淳 …… 31
わが謡曲部の稽古風景
堺工場謡曲部 …… 17
四日市工場謡曲部 …… 22
本社謡曲部 …… 24
謡曲十五徳 …… 2
協和うとう会会員名簿 …… 56
編集後記 …… 84

ごあいさつ

協和うとう会会長　新井　純

協和うとう会のはじまりは、昭和三十五年でしたから今年で満三十二年になります。

十数名で始まったこの会が、今や数十名の大勢になって、毎年休みなく開かれます。よくも続いてきたものと思われます。

幹事の方々の一方ならぬご苦労と厚く御礼を申し上げます。

二十周年記念誌の発行後の十年間に、私は五回しか参加しませんでした。申訳ないことです。

特に第三十回は私にとって因縁浅からぬ、防府で催されたのに参加せず、まことに残念に思っています。

現役、OBの同好の士が全国から相集って、二日間にわたり謡い、舞い、はやす。それが三十回を越すとは…。なかなか大変なことです。

幹事のお骨折りでそれがなされているのです。

繰り返し、ご苦労に御礼を申し上げます。

ご精進の甲斐あって、師範を得られた方もおられるようで、まことにご同慶の至りです。ますます、会を引っ張ってください。

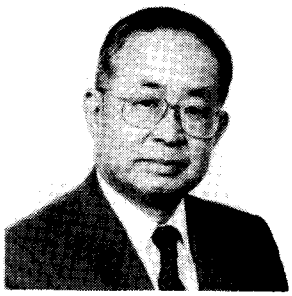
番組を見ると、存じ上げぬ方が多数おられます。若返ってきたのですね。これで会がますます長く続くと思われ、大変うれしいことです。どうぞ、もりたててください。

最後に、何かとご援助をいただいている会社に対し、まことに有難く厚く御礼申し上げます。

謡曲十五徳

不行而知名所
在旅而得知音
不習而識歌道
不詠而望花月
無友而慰閑居
無薬而散鬱気
不思而昇座上
不望而交高位
不老而知古事
不恋而懐美人
不馴而近武芸
不軍而識戦場
不祈而得神徳
不触而知佛道
不厳而嗜形美

檜書店発行「観世」から



協和うとう会 三十周年を祝して

協和発酵工業㈱社長　中村寛之助

協和うとう会が三十周年を迎え、心からお祝申し上げます。

この会が三十年も続けられたことは、まずこの会を育ててこられた新井会長、観世の磯部さん、富岡さん、宝生の高橋さん、水原さんら関係者の熱意とご努力の賜で、あらためてこれらの方々に感謝と敬意を表します。

昨年八月、前社長が急逝され、私が後任の社長に就任しました。就任した日に新聞記者の新社長インタビューがありました。あらかじめ私の趣味はゴルフということになっていましたが、記者の方々から、今どきゴルフは趣味に入らない、何かほかにないか、と問い詰められました。私は「強いてあげれば謡曲ぐらいかな」と口にしてしまいました。翌朝、私の謡曲は天下に公表されることとなりました。

私の謡の歴史は中断の歴史でした。始めたのは協和発酵に入社して間もない昭和三十年頃でした。当時、本社は日比谷の第一生命ビルにありました。第一生命に教えに来られていた宝生流の三川泉先生に入門しました。その後、稽古は中断してしまいましたが、家内が私と同じ宝生流の謡をやっていましたので、ときどき共に謡ったり、能を見たりしていました。

記録によると、私は協和うとう会の第九、十、十一回に参加しています。昭和四十五年頃のことです。水原先生の本社宝生会に加えていただいたのです。これもやがて中断してしまいました。

正式に謡を再開したのは、昨年の一月でした。リタイア後の生活に備えて謡を始めました。昔から面識のあった関西・宝生流の広島克栄先生に入門しました。現在も時間の余裕はありませんが、今度は中断せず続けようと月に一、二回の稽古を出社前にこなしています。

今年に入って、七月二十五、二十六日両日、東京水道橋の宝生能楽堂で広島先の大会がありました。私は「翁」のシテ謡い、家内は初めての能で「玉葛」を舞いました。番組を旧師の水原さんにお送りしました。さっそくに、私が宝生を再開したこと、私の家内が能を舞うことに驚き入るとともに、大変嬉しく思った旨のお便りをいただきました。そして今後も継続して稽古するように、私への激励もありました。

最後に、協和うとう会が今後ますます発展するようお祈りいたします。また、私自身、うとう会の皆様とご一緒できる日を楽しみにしています。

みんなで語った わたしの謡一徳

謡には「謡曲十五徳」あるいは「謡曲十徳」という謡曲の奥深さを表現した、たいへん素晴らしい言葉があります。

私たちにも謡を続けていて「こんないいことがあった」「謡をやっていたおかげでこんな素晴らしいことがあった」という経験があると思います。協和うとう会三十回記念大会の一つの企画として、懇親会出席の全員で「わたしの謡一徳」としてそのうちの一つだけを紹介し合いお互いに今後の過ごし方がさらに充実したものになるようにしたいと思います。

（司会・安島将のあいさつから。「謡曲十五徳」は二ページほか）

うとう会なればの幸せ

十年振りに皆さんと

大坪　一弥（九州）　協和うとう会は第二十回に富士工場から参加して以来、ちょうど十年振りになる。今は佐賀の片田舎にいるが、出て来いというお声がかかって皆さんにお会いできたこと、これは謡のおかげだ。たいへん感謝している。

山口で初めての「協和うとう会」を駅前の山頭火像も歓迎

謡ゆえのご縁に感謝

望月　美江（富士）　富士工場時代からうとう会のお世話になっている。協和発酵とのご縁も長く感謝している。東に西に行かせてもらい、ありがたく思う。謡ゆえのご縁だと感謝している。

創ってよかったうとう会

西村　淳（本社）　私は富士ＯＢ、防府ＯＢ、本社ＯＢになる。協和発酵のいろいろな社友会行事の中で、ＯＢ・現役が集まって三十年も続いているのは、うとう会だけだと思う。うとう会をつくる三十年ほど前に、創始者の一人として参加したが、会に呼ばれるようになった現在、うとう会を創って非常によかったと思っている。

いつまでも会える

山田　義之（堺）　謡を始めて二十年くらいになる。今日もこうして歴代堺工場長の木谷さんと平尾さんにお会いできる。お世話になった方に会えることはありがたいことだ。結婚式に呼ばれて何も芸がなく、スピーチを頼まれて困っていたが、謡を習ってから苦手のスピーチをしなくてすむようになった。

謡は二の次の楽しみ

山口　整次（堺）　謡は二の次にして、このような席で皆さんとお話ができ酒が飲めることが一番の楽しみだ。最初に謡を教わった福島先生は九十歳になられる。現在もお元気で謡に精進されている。これは謡のせいだといつも聞かされている。

七夕の楽しみと励み

八尾　和広（東京）　第二十一回から参加している。酒を飲むために来ているのが本心だ。年一回の七夕みたいにお会いする方が多い。「この人の謡はほんとうにうまくなったなぁ」と思うと、自分が惨めになることもあるが、これを自分の励みにしている。

転勤しても謡が習える

西野　邦明（名古屋）　昨年は大阪グループで参加、今年は四日市グループからの参加だが、四月に名古屋支社へ転勤してこのようになった。当初、四日市まで稽古に通おうと思っていたが、現実には不可能とわかったので、木谷先輩の奥様のところへ通っている。出席率五〇％で不真面目だが、どこへ行っても謡を習うところを斡旋してもらえるので、どこへ転勤してもこわくない。

薬師寺で朝のお勤め

土居　鋭一（大阪）　何か良いことがあったというより謡をやっているといつか良いことがあるだろう、と思ってやっている。あえていうなら昨年のうとう会で薬師寺へ行って、朝早起きして読経してお粥をたべて…、という経験は全く謡のお陰だった。

あいにくの台風被害で

竹林　実（防府）　謡を始めて十数年になり、うとう会は七、八回参加している。防府は台風十九号に傷めつけられて、まだあちこちに被害が残っていている。そのため初めての方は防府工場は汚いな、と思われるかもしれないがまた来ていただきたい。

防府へ三十年振りに

木谷芙美枝（四日市）　三十数年前に、茨城県から出た

うとう会三十回に乾杯！

高橋　孝夫（富士）　協和うとう会三十回記念大会、まことにおめでたい。三十回にして防府の地で初めて開くことができました。防府は私自身も昭和三十二年以来で、思い出深いものがあります。二日間のうとう会は半分が終わりましたが、明日も張り切ってがんばりましょう。うとう会の三十回を祝して乾杯！

（懇親会のあいさつ。写真は「藤戸」を謡う高橋さん）

ことのない私が主人の転勤で防府工場に島流しにあったような気持ちで来た。社宅で謡に誘われて「鶴亀」から始めた。宇部工場・堺工場・名古屋と謡を介してお友達がたくさんできた。その方たちと今一番親しくさせていただいている。謡を始めた防府に、三十年振りに来れたことが一番うれしい。

謡を始めた思い出の防府へ
三十年振り…木谷さん

社員OBになっても現役

藤井　武夫（大阪）　昭和四十六年、本社の時にうとう会とのご縁ができた。途中、中断していたが、大阪に転勤になって再び磯部先生にご縁をいただくことになった。OBを含めた会で、三十年も続いているのはうとう会だけというのは素晴らしい。私は学校時代から会社を含めて、サッカーを四十年近くやってきた。五月にそのOB大会があったが、サッカーは身体が動かなくなれば宴会要員でしかない。うとう会は会社のOBが現役でますますお元気でやっておられるので、社員の資格はOBだが、うとう会は声が出る限り現役の会員を続けられるという期待を持っている。

謡、面打ち同じ釜のめし

松田　重久（宇部）　私だけが謡と畑違いで、この会に参加している。宇部の方で今回も面（おもて）を持って来て盛り上げてほしいと頼まれて来た。今年は額も持って来てバックを作ってみた。能の中での謡であり、面打ちであり仕舞であり、同じ釜のめしを食べる者同士ではないかと思う。私は謡を勧められているが、面を打つことに命をかけており、二兎追うものは一兎を得ずということになりかねないので、面打ちにかけている。先週も中国版テレビの取材を受け、ちょっと出た。これからも皆さんとともに、ますますがんばりたい。半年に一面くらいしか打てないがぜひというご要望があれば打って差し上げてもよろしいかと思っている。

一期一会、仲間のご縁

いろいろな友達が一番

今田　義信（防府）　いろいろな方と友達になれたことこれが一番だ。

一期一会、倶会一処

加藤　七弥（宇部）　一期一会というか、倶会一処というか、今皆さんとご一緒できて感謝している。謡をやっていたおかげで、今でもOBとして声がかかる。そのためには健康でなければならない。声を張り上げるには健康でなければできない。

たくさんの人と知り合いに

山家多喜男（四日市）　一番の徳として、老若男女貴賤都鄙、いろんな方と知り合いになれたことで、素晴らしいと思う。

まだ始めて三ヵ月

田村　直邦（大阪）　謡曲を始めてまだ三ヵ月なので、ただ声を張り上げているだけ

でいいことがあったとか、なかったとかいえないが、しいていえば、これだけ大勢の社員やOBの方々と近づきになれたということがある。今後謡曲そのものによいところを見つけていきたい。

皆さんとのご縁が一番

三谷　哲雄（宇部）　皆さんとのご縁が一番で、感謝している。今、九番習いまで免許をもらっているが、重習いは一曲三～五万円かかるのであと百万円くらいかかりそうで、ボーナスをあてにしている。今は現役だがOBになってもよろしくお願いしたい。

酒屋を切り盛りして稽古に

花田　有紀子（宇部）　謡を始めて五年になるが、多くの仲間ができたことを喜んでいる。宇部工場の近くで酒屋をやっており、協和発酵の製品をほとんど置いて、一生懸命協力している。火曜日が稽古日で、四時半に家を出るが店の方もうまくやっている。

謡のつながりに感謝

鈴木　正直（本社）　協和発酵へ月二回定期的に足を運ぶのは、謡の稽古だけ。忘年会を例にとっても、昼間の誘いはいくつかあるが、夜の宴会は謡曲部の忘年会だけで、まことにありがたいつながりだと感謝している。（紙上参加）

仲間あり、退屈知らず

退屈することがない

浅原　方平（九州）　二年前から、金はないが時間だけたっぷりあるようになった。若い時から謡をやっていなかったら、今頃はドエライことになっていたと思う。謡の仲間も増えた。ラジオ、テレビカセットテープなどを聞いたりで退屈することはない。趣味は若い時からやっていてよかったとつくづく思う。友達の輪が広がっていくことは、何よりの宝だと思う。

仲間が増えて退屈知らず

磯部　武夫（大阪）　他の人もいわれているように、私も同好の友達が増えた。謡は昭和二十一年から始めたが、そのときから病膏肓（やまいこうこう）で、数人の仲間と「能楽通信」という同好雑誌を作って、亡くなった家元と対談したりしていい顔をしていた。うとう会の仲間に加えて、大阪でもたくさんの仲間が増えた。定年退職したあとヒマで困っているという話をよく聞くが、私は謡のことで退屈することがなく、楽しくやっている。

謡で退屈知らずの磯部さん

朝から晩まで謡のこと

高橋　孝夫（富士）　もし私が謡をやっていなかったら今どうしているだろう。退屈で、退屈でしようがなかったと思う。幸いに何も退屈していない。朝から晩まで、謡のことばかり考えている。実に幸せです。

先輩の真似をすればよい

田辺　博章（本社）　私は富岡さんに引っ張り込まれて謡を始めた。考えてみると定年後が怖くなくなった。今、富岡さんの昔以上にバリバリ

やっておられる姿をみると、同じように真似をすればいいんだ、という感じがする。たとえ九十、九十五歳まで生きても、謡をやっておれば、ヒマで困ることはないと思っている。

謡は健康と元気のもと

健康だ、ずっと現役だ

植松　武（門司）　私の場合一口でいえば「健康」のこと。平成四年一月から六十六歳で健保の保険料がタダになるが、まだ現役でやっている。職場が騒音のある所で、大声を張り上げていることもあると思う。防府・宇部工場が近く、三工場の謡の会には参加させていただいておりこれからも現役を続けたい。

だんだん元気になる

大橋　良作（富士）　謡の効用は、だんだん元気になることだ。ただ、あんまり大きな音を耳の傍でやると難聴になるので、気をつけた方がよい。

門司の「大佛供養」。左から島田・藤田・植松・江頭さん

健康と結婚式

江頭　博（門司）　一つは健康のためになること。もともと音痴だが、音痴ながらに謡がうたえるようになり、いなかの結婚式でもうたっている。

腹が減って健康だ

門林　末男（堺）　磯部先生のお世話になって一年になる。謡の後はいつも腹が減って健康にいいなと思う。先生が練習熱心なため夕飯がいつも九時過ぎになり、それで腹が減るんだなーと思う。

呼吸法をマスター

山野　順三（四日市）　うとう会は三回目の参加で、何がよいかとなると困るが、一つは渋い声が出せるようになった。呼吸法の丹田呼吸、腹式呼吸ができるようになって健康によい。また、古典の素養ができて知ったかぶりでき崩し文字が少しくらい読めるようになった。

休肝日をつくるために

村上　静男（宇部）　謡を始めた動機は、「愛社精神もほどほどにして、休肝日をつくったら」ということで、一週一回、酒を飲まない日をつくった。私がよかったことというより、女房が喜んでいるのではないかと思う。

三十回記念の年に還暦

永富　正人（宇部）　第三十回記念はまことにおめでたい。奇しくもこの年に私は還暦を迎えた。謡の練習の後は酒がうまい。それ以外にはない！（笑い）。

仕舞で足の痛みが消えた

永岡　重信（宇部）　以前に足が痛くなった。その時家内が足を上げる体操を始めたので、私も負けん気になり仕舞を始めたら、足の痛みがなくなった。これは謡のおかげと感謝している。

結婚式では"貴重品"

めでたい席に華を添える

富岡啓太郎（富士）　先週の土曜日、東京の三井クラブで結婚式があり、藤田大五郎さんの笛、小寺佐七さんの太鼓、シテが観世元昭さん、ワキが岡久広さん、といった方々の舞囃子で、私が大鼓（おおかわ）を打った…というとすごいと思うでしょう。実はそのテープをかけて、私が大鼓を共演したわけ（爆笑）。

仕舞で足の痛みが治ったという永岡さんの仕舞「清経」

謡をやっていると、こういう具合におめでたい席に華を添えることができる。私も定年になって、閑居を楽しんでいるヒマがない。

結婚式で楽しい酒

池田　進（防府）　謡は昭和三十年から始めて今日お聞きの程度だが、結婚式でちょっとうたうと周りから杯がどんどんくる。酒が飲めるので謡をやっていてよかった。OBになってからも今日こうして宴会に同席させていただき大変喜んでいる。

婚礼では大変な武器に

大森　大陸（本社）　謡曲十五徳、多くの人とのご縁もできた。婚礼に呼ばれた時に大変な武器になる。最近の結婚式はあまり「高砂」などないようだが、そこで「四海波静かにて…」とやると、場が大変締まって喜ばれたことが何度かある。大変よいことだと思っている。

「結婚式で謡って」と

矢尾　幸三（富士）　昨年入社し、今年の春、中里先輩に「ちょっと見学に来い」と誘われた時には、もう坐って「鶴亀」を謡っていた。最近まで謡をやっていることを隠していたので特にいいことはなかったが、それがバレてしまって若い女性から「結婚式で謡ってほしい」といわれうれしい。

子供の結婚式で謡を

松崎　勝正（防府）　十三年前の三十四歳の時に森脇先生に習った。「自分の子供が結婚する時には謡の一つも披露できるようになりますか」と聞いたら「十分間に合う」といわれた。二十回大会以来謡から遠ざかっていて、今回の参加となった。謡を始めて一年くらいのころ、友達の結婚式で謡をやる人がだれもいなかったので、自分がやったら大変好評で光栄だった。

うとう会で名所旧跡めぐり

浅間山、伊勢志摩など…

藤田善次郎（門司）　謡は相知工場時代に始めた。門司に転勤して現在までやっており、歴史は古いが未熟だからもっともっとやろうと思っている。うとう会でありがたいのは、会が終わった後せっかくの機会だからと足を延ばして浅間山、伊勢志摩など、あちこち行けるのが楽しみだ。

観世発祥の地で謡の会

浅井　昇（四日市）　昭和二十三年にこの防府で謡を始めた。その頃は、部員も少なかったが新井先生が奮闘されて三十名になった。女性が活躍した。四日市に行ってか

ら観世発祥の地である名張の謡の会に行ったことが印象に残っている。

景色のいい会場で

吉岡　征一（宇部）　最初のうとう会参加が、五年ほど前の琵琶湖の長浜の景色のよい会場で温かく迎えていただいた。それ以来皆勤賞だ。

普通では行けない所へ

長倉　久子（富士）　第二十回は友達の結婚式があって出れなかったので、記念大会は今回が初めてになる。うとう会のおかげで、一般の観光旅行では行けない所へ行けるし、普通は入れないような所でも会場になると見られることは素晴らしい。ちょっと不真面目かも知れないが…。うとう会の後の旅行もまた楽しい。

高尚な趣味に尊敬の眼差し

高尚な趣味といわれて

島田　純一（富士）　高橋先生に謡を習って一年くらい経った。まだ、よかったことは特にないが人に謡をやっているというと、「見かけによらず高尚な趣味を持っているね」といわれる。喜んでよいのか、悲しんでよいのかわからないが（笑い）、中身がそうなるように努力していきたい。

尊敬の眼差し？で見られる

中里　宜資（富士）　普段酒を飲んでチャラチャラしていても「謡をやっている」というと、女の子が「あーっ」と（爆笑）尊敬の眼差しか、不審の眼差しかよくわからないが、そんな目でみられる。このように、ご年配の方とも仲良くできること、これに加えて良縁に恵まれたら「謡曲十六徳」にしたい（笑い）。

富士の「鶴亀」。役は右から長倉・矢尾さん

女房が尊敬の眼差しで

佐藤　護（堺）　謡を始めて久しいが、よく練習を休む。ちょっとおこがましいが低音がよく出るようになり、カラオケがうまくなった（笑い）。謡をやっていると女房が私を尊敬の眼差しで見てくれる（拍手）。最近、子供にも謡を習わせてほしいというが、私の実力がバレてしまうので適当なことをいってごまかしている。

富士の「鵜飼」。役は右から大橋・中里・鈴木さん

これは品の良いこと

昼田　了（宇部）　謡はまだ宝生のホの字くらいしかやってないが、仕事柄日頃はヤクザの親分みたいなことをやっており、こんな品の良いことをやっていいのかな、と思っている。これからも品よく過ごしたい。

カラオケもうまくなった

カラオケに謡の成果が…

有馬　敏雄（宇部）　謡曲を始めて三年目になる。謡曲をやってよかったことはカラオケが歌えるようになったことだ。ご要望があれば一曲ご披露したい。

確かにカラオケ効果あり

鈴木　正美（富士）　五年振りの参加で感謝している。前の方から謡のカラオケ効果の話もあったが、これは確かにあると思う。裕次郎の歌に「わが人生に悔いなし」というのがある。わが人生、特に夜と雨の日の時間の生産性が大変よろしい。（部屋割りで女性にされた一幕あり）

大声でストレス解消

かつての防府謡曲部員の左から坂本・関・柳さんも鑑賞に

人脈とストレス解消

上森　茂（四日市）　二十一回の多賀大社が最初のうとう会参加だった。十年経って人脈が増えた。防府工場にも在勤で来たことがあり、その時練習に参加させてもらったことがある。大きな声でストレス解消にもなると思っている。

仕事の疲れがとれる

内田　和子（防府）　謡は五年になった。よかったことの一つは仕事ですごく疲れていても謡の稽古でストレスの解消ができることだ。帰る時の方が、朝より元気になったりする。もう一つ、父親以上の年代の人から可愛がってもらえて得をしていると思う。

謡なればこそ、その徳あり

夫婦でやっているのがよい

木谷　正敦（四日市）　うとう会を知ったのは、昭和四十四年に堺工場に行ってからのこと。三十四～三十八年の防府工場時代に、森脇さんに習っておけばもっとうまくなっていたと思っている。謡の効用は、仕事を離れても退屈しないことだ。六十五歳で仕事を離れた時に無性に謡がうたいたくなった。今は同好の士と一緒に月に何回もうたっている。私の家は夫婦でやっているので、家でうなっても怒られないのがよい（「イヨーッ」、拍手）。

「夫婦で…」と木谷さん

ロータリークラブで大反響

平尾　學（富士）　うとう会は第十一回から出席して

「趣味は謡です」平尾さん

謡でうっぷんばらし

島田　活志（門司）　時には家内と口論することもあるが、そのうっぷんばらしに謡をうなったり、テープを聞いたりしてストレスを解消している。

いる。防府工場に十六年いながら、謡はやらなかった。昭和四十五年に富士工場に行ってから始めたので、富士宝生のOBということになっている。私は最近やっと「趣味は謡です」といえるようになった。現在黒金化成という関係会社の知立の工場長をしているが、ここは謡曲「杜若」の舞台の地だ。そこのロータリークラブでは会合で順番に三十分の卓話をすることになっている。私は謡の話をした。いろいろ調べてワープロで四ページくらいにまとめ、それをもとに話したら、えらい好評だった。意外にも会長をしている方が、学生時代に宝生流の宗家に習っていたこともわかった。反響もいろいろあって、「杜若」の能が見たいという人がでてきた。ビデオテープがあったら教えてほしい。

「實盛」を謡う森脇さん

「謡があっていいわね」

森脇　亮（防府）　謡を始めて約四十年になるが、最近家内に「あなたは謡があっていいわね。私をほっといて、あちこち行けていいわね」といわれる。

ワシントンで先生とデート

野村　忠亮（本社）　一九八八年の会（第二十七回）は海外出張中で参加できなかった。この年の十月から、日米文化交流の一つとしてワシントンで「大名美術展」が開かれ、そのオープニングに観世流の坂井音重師を団長として演能団が派遣された。その一員に本社観世が教わっている小野葉満子先生がおられた。ちょうど私の出張中のスケジュールと合って、先生とお食事をすることできた。これだけ規模の大きな演能団が海外派遣されたのは初めてということで、先生から貴重なお話をうかがった。（紙上参加）

大変深い何かを期待

森山　圭雄（宇部）　富士工場で二十五年、宇部工場で六ヵ月だが、謡は今年八月から入れてもらった。まだ「鶴亀」と「紅葉狩」を少し習っただけで、ほんとうはこの会に出る資格はないが、宴会要員で出るようにいわれた。何がよかったかというより、なんでこんなにむずかしくするのかな、と悩んでいる。これから勉強してわかるようになりたい。大変深い何かを得られるのでは、と思っている。

「勉強して…」と森山さん

息子と娘が前途有望？

水滝　彰一（堺）　家ではめったに練習しないが、たまに休みの日にやっていると、小学二年の息子と幼稚園の娘が側に寄って来て一緒に口まねをする。今からやっておれば前途有望かな？と思っている。

幽霊を身近に感じる

原田　博彰（防府）　年代の違う方々とお近づきになれたことやストレスの解消は言うに及ばず、幽霊を身近に感じるようになった（「ほー」の声）。別に幽霊を信じるわけではないが、謡曲には幽霊ものが多く、人を好きだとかいう情念が凝り固まって出てくるものなので、それを想像して役になりきってやらねばならないと教わって、考える

機会ができた。恋愛経験も未熟でまだ独り者だが、近くにいい人がいたらよろしく。

良いことあるまで続けたい

西本　徳之（宇部）　謡を始めて間がないが、一番よかったのは先生の会に行って、いただいた弁当がてとてもおいしかったこと。そんな会にはちょくちょく顔を出し、もっとすごく良いことがあるまで続けていきたい。

謡は芸術だ

仁木　卓（大阪）　謡を始めて四年になるが、練習もできずに悩んでいる。謡は芸術だと解釈する。（「うおーっ」、笑い）。

謡で親孝行

中原　博明（防府）　私の母は明治四十五年生まれで七十八歳だが、私が謡をやっていることを知っていて、実家へ帰るたびに「謡をやっているか」と聞かれる。「やっている」と答えると安心する。（「親孝行！」）

むずかしい字が読めだした

中川　慶次（宇部）　私は宇部工場ではなく、協力会社「中川鉄工所」の中川です。父が協和発酵ＯＢの中川雄作で、謡をやっていた関係で勧められて始めた。まだ一年半くらいだが、最近よかったと思うのは、むずかしい字が読めだしたことだ（笑い）。こんなむずかしいことをやっていた親父は偉いんだなーと思う（笑い）。

今日もしゃべったぞー

但見　靖啓（本社）　家族を博多に残して東京に単身赴任しており、土・日の休みに寮にいると、ほとんどしゃべることがない。口の辺が堅くなる。謡をやっていると大きな声を出して「今日もしゃべったぞー」という気になる。謡はいいものだ。

あと八年待ってほしい

高田　功三（大阪）　うとう会は二回目の参加になる。いいことよりも、月末の練習日は苦痛になる。営業の数字が頭にあって、口先だけが動いている感じだ。修業は十年やって一人前といわれる。謡曲をやってよかったなーといえるようになるまで、あと八年待ってほしい（「待ってるぞー」、爆笑と拍手）。

ゆっくりすることの大切さ

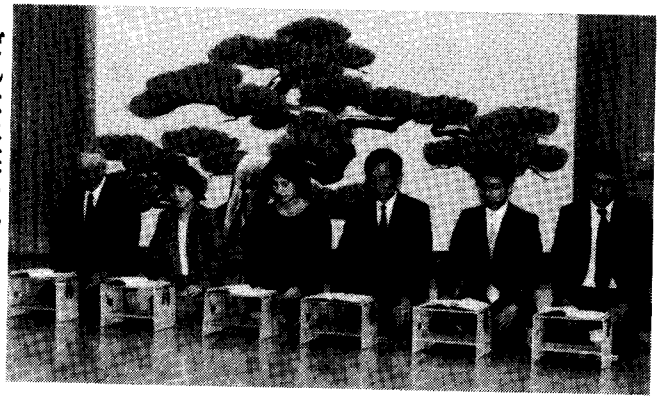
杉山　喜好（防府）　謡歴十年になる。謡のリズムに速いのとゆっくりがある。私自身は速い方について行けないし、ゆっくりの方にもついて行けない。世の中、急げ急げで、仕事も速くやれと急ぐがゆっくりすることも大切でないかと思う。急ぐこと

上・「猩々」を舞う西本さん。下・宇部の「紅葉狩」。役は左から西本・貞永・中川さん

切だが、ゆっくりすることも大切だ。謡歴十年の中でこんなことを思っている。

よいことが三つある

重村　節子（防府）　謡を始めていつの間にか八年経った。うとう会は隔年参加で今回で四回目。私には子供が三人いて家庭の事情もあり、また仕事の事情もあり、皆勤できなかったことを残念に思う（「四人目は？」の声）。それはもうない（笑い）。謡をやっていてよかったと思うことが三つある。まず一つは、謡曲をやっていると歳を感じない。二つ目は仕事でいやなことがあっても、謡の練習で大声を張り上げて家に帰るといやなことはすっかり忘れている。三つ目は、定年になっても退屈せずに楽しんでいるというお話をたくさんの人から聞いて、定年後に夢を持たせていただいた。



防府「大原御幸」右から中原・原田・沢野・内田・重村・池田さん

どんなに笑われても続ける

貞永　納（宇部）　この春の宇部・防府・門司三工場の謡の会で、初舞台を踏んだ。明日が二度目の舞台になるので、いささか興奮している。今朝六時から家で明日の謡を稽古したら、そばで女房と子

面打ちに魅せられて

松田　重久

（野村　鷺）の門をたたいたが、思うほど甘いものではなく軽く断られた。

その夜は悔しさで眠られず再度訪れてお願いし、現在は弟子は十一名。全員何よりも面打ちが好きな変わり者ばかり？

樹齢百年以上の木曽桧

『質問その二』――材料の木は木曽の桧で百年生以上、切り出して二十年乾燥させたもの。その他古代からの胡粉（貝の粉）、金粉、古代色等々。

次に大切なものは、刀である。いろいろな形のものがあり、面打ちの前に心を落ち着かす準備として刀を研ぐ。この切れ味が出来を左右する。

神楽面に取り憑かれて

『面（おもて）打ち入門』――人は一応にこの道に入った理由を聞くが、いつでも答えとして、願望とチャンスがあったから、という。

防府の田舎に生まれ、村祭りの大神楽を見て育ち、やがてその保存会の一員となった若いころ、神楽面の素晴らしさに取り憑かれ、当時自分で作ったものがわが家に今も残っている。

一旦は入門断られる

二十年後（四十三歳）の営業時代のある日の朝、時間待ちで読んでいた新聞に、能面作りの記事があった。これぞ自分の生来の趣味になるチャンスと早速記事を頼りに先生

供が「謡ではなく、イガッテいるだけ」と笑った。私はどんなに笑われても謡を続けたい（尊敬の拍手）。

素直な気持ちになれる

岸田　軍二（宇部）　謡をやっていて最近感じるのは素直な気持ちになれるということだ（「うわー」、「在家仏教みたい」）。家庭では女房に対して、職場では課長に対して、素直になれないものだが、謡の時は先生にたいへん素直になる。先生のおっしゃるとおりになる。自分に素直になることは大切なことだとつくづく思う。

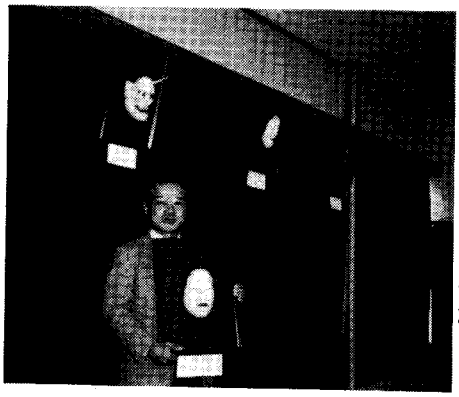
祖父の大正九年の謡本で

松岡佐代子（防府）　昨年十二月に入部し、森脇先生に習っている。短大時代、国文科で謡本の中身に興味を持った。それが知りたくて謡曲部に入ったが、今は中身を知るどころではなく、ただ一生懸命うたっている。謡を始めてから知ったことだが、祖父と叔父も謡をしていて、大正時代の謡本が出てきた。明日それを使ってやりたいが（「うわーすごい」の声あり）「紅葉狩」の本が大正九年のもので読みづらいので間違うかも知れない（笑い）。結婚する時に自分で「鶴亀」がうたえるか、と思っている。

鼓の修業は楽しさより辛さ

三池　公恵（富士）　謡は二十三年前、主人が宇部工場勤務の時に、藤沢さんと一緒に始めた。東研のあと富士工場へ転勤になり大坪先生に子育てしながら習った。その後富岡先生に謡と仕舞を習っていたが、富士の観世グループがなくなった。今は高橋先生に鼓を習っている。謡をまず暗記して、それから鼓を暗記するので、楽しいというより辛いという感じがいっぱい。

松田さんは前回に続いて自作の素晴らしい能面を会場に



うとう会の熱意に感動

『能楽の追求』――六百年の歴史を、世阿弥の唱えた幽玄第一主義を守り通し、磨き上げることに費やされたといわれる。

演劇として動きの少ない中で表現する素晴らしい芸術であると思う。その追求のため現在も能、またその一部の謡曲、仕舞、囃子と引き継がれ練習に励む協和うとう会も第三十回を数え、皆様の熱意に感動を受けます。

無心無風の位に精進

『面』――三百種類とも五百種類ともいわれる面の中には、扇の面、神仏の面、女面男面、老人の面、鬼畜の面と分類することができる。

古面それぞれに、何かを訴えかけているもの、品位の高いものを重んじるとされており、世阿弥の精神をもって無心無風の位に一歩でも近づくよう、厳しい指導を受け、精進したい、これが生涯の願望である。

（千代田開発　宇部営業所）

＃　＃　＃

松田さんには、うとう会二日間お付き合い願い、「わたしの謡一徳」も述べていただきました。六ページ掲載。

俳句にも使える謡

齋藤　弘之（大阪）　三十年代の半ばに防府工場で森脇先生にご指導いただいた。現在は大阪支社で磯部先生にご指導を受け、よき師に巡り会えたことに感謝している。謡の効用はたくさんある。まず謡を通じて心の通い合う友達がたくさんできたことが一番うれしい。二番目は、週一回大阪支社へ稽古に通っているが現役の若い人たちと会えることが私の栄養になってありがたい。吹田市の「生きがい教室」の俳句をやっているが次々と宿題が出される。謡の本の中にすばらしい言葉がたくさんあり、それを使ってカンニングして二重丸をもらったことがある。西の方向を表わす言葉に謡に「西方（にしかた）」というのがあり、これを俳句で使ったら先生に褒められた。

俳句にも謡が…と齋藤さん

謡ったあと酒がうまい

加来　佐吉（防府）　まだ大きな声を出すところまでいっていないが、謡で声を出した後は酒がうまい。悪いことは、演歌が歌えないようになったことだ。私が謡曲を続けるには、いかに練習に出るかにかかっているので努力したい。

マイクなしで長時間の講演

安島　将（本社）　労働組合の委員長をしている頃、よく外部から講演依頼があり多い時は午前中に二時間やって、午後別の所で一時間しゃべったことがあった。私はいつもマイクロホンなしで聞こえるようにやった。これは謡の発声法であったと思う。ただ、ＯＨＰを使いながら首をひねたままでしゃべり続けた時は、声が枯れてしまった。正攻法なら今も二時間や三時間なら十分自信がある。

一人ひとりの「一徳」に拍手

シビレに自信がついた

沢野　忠男（防府）　ソフトウエアとハードウエアとにたくさんあるが、ハードウエアの一つだけ紹介すると、足のシビレに自信がついたことだ。

酒の付合い断わる理由に

菊守　悦三（大阪）　入部して一～二カ月のころ、うとう会二十周年の記念誌をもらった。名簿に名前が載っている。大阪支社謡曲部は部員が十名いる。早く家に帰りたい時に飲みに誘われても「今日は謡の練習がある」というと大ぴらに勘弁してもらえる。謡の練習のあるときは「今日は仕事がありますので…」と逃げることもあり、両方を使い分けている。話は変わるが中村社長の趣味は謡曲だと新聞などに書かれている。今後うとう会の会場が東京に近い

時は、ぜひ、引っ張り出していただきたい。

防府でみんな若くなった

古谷　正勝（宇部）　この会場の玉泉湖温泉小唄に「若くなりたきゃ　防府においで…」とある。皆さん、今回のうとう会参加で若くなられたわけだ。

二日目の打ち上げ風景

ますます素晴らしい会に

司会（安島　将）　うとう会のような同好会で、謡や仕舞は言うに及ばず、笛・鼓・大鼓（おおかわ）・太鼓など囃子も一つの会で一通り揃っいてるというのは、ほんとうに珍しいとよくいわれる。これは、わがうとう会のレベルの充実振りを表わすものだと思う。今度はこれに能面を本格的に打つ人も加わり、ますます素晴らしい会になった。そのうちに、協和うとう会が国立能楽堂を乗っ取るようになるかもしれない（笑い）。それぞれに味わいのある素晴らしい「わたしの謡一徳」をありがとうございました。

（平成三年十一月九日・防府市・玉泉湖温泉で収録）

わが謡曲部の稽古風景

堺工場謡曲部

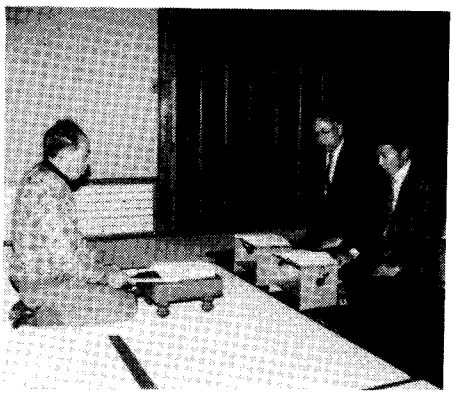
楽しく謡おう！がモットー

・部　員　六名
・指　導　磯部　武夫先生
・稽古日　毎月四回。金曜日
　十八時～二十時
　於　うりの荘

練習は厳しいが、その後の勉強会？が楽しみ。「蕪村」を飲みながら、磯部先生のお話や世間話に夜も更ける。

今年も、よく観、よく聴きよく謡う楽しい年にしたいものだ。

（平成四年二月　山口記）



上・堺工場の稽古風景と、下・引続き楽しい勉強会？

協和うとう会のあゆみ　第二十一回から十年の足跡

磯部　武夫

第二十回（正確には第十九回）までの「協和うとう会の足跡」を水原さんが書かれたが、同じようにその後を書けと安島幹事から指示がありました。水原さんのを読み返してみますと、いろいろの資料をもとに書かれてあります。私はそんな資料を保存していません。

なるほど、第二十回くらいから、番組編成のお手伝いはしていますが、そのために嚊子の打合せなどの連絡や相談の手紙のやりとりをしています。しかし、本番組が出来上がるとそれらは焼却してしまって、残っているのは、印刷された本番組だけです。とても水原さんのような詳しいものは書けません。まあ、日記にいろいろ書いていますのでそれをみながら、その時々の思い出でも書くことにしましょう。

さて、第一回から三十回までの開催場所をみますと、一・三・四・五回の健保・熱海荘と十五・十七・二十七回の湯の山・希望荘以外は、すべて違った場所です。これは会場をお世話された事業場の担当者のたいへんなご配慮によるものだと思います。たとえば、第二十回の記念大会は、清風クラブで開催されましたが、あの会議場に畳が敷かれました。また平成二年の奈良・薬師寺では、お寺にいろいろお願いして一つの御堂を借り切りにするなど、そのほかにもそれぞれの配慮、工夫されたことがよく拝察できました。このようなことがあって皆さんそれぞれの会場に、いろいろな思い出を残されていることと思います。

私の先生や謡仲間に「二十周年記念誌」を見せますと、皆、唖然として感心します。もっと少人数ならよくありますが、これだけ多くの人数で一社の行事としてはまずないと思います。これは何人かの指導者とそれを助ける世話役の努力があってこそできたものです。

さて、第三十回までにどんな曲が謡われたか、素謡のみについて調べてみたら別表のとおりです。二百曲の半分を謡っています。

以下に日記から思い出を振り返りながら、足跡を追ってみましょう。

第二十一回　昭和五十七年十月十六・十七日

滋賀県・多賀大社参集殿

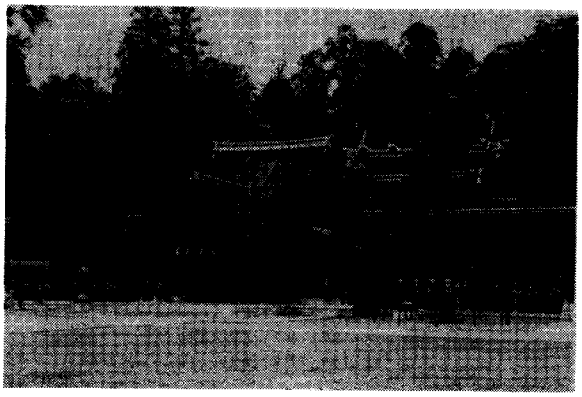
当時の堺工場長の平尾さんから、多賀大社に謡に最適な大広間があって、泊まるところもきれいで、野外だが能舞台もある…という情報が入った。さっそく平尾さん、福井さんらと下見に行く。

舞台は野外で相当傷んでいたので諦めたが、参集殿はなかなか立派であった。

全館借り切りを申し入れたが、十七日は大安だから無理

ということであった。大広間は確保した。多賀大社は、伊弉諾尊、伊弉冉尊をお祭りしたお宮である。

この会の初参加の人は九人で、その中に、学生時代に山本順之師に習ったという木野君がいた。（安島注…平尾さんからの連絡に、七時から早朝参拝、代表玉串奉奠、神社由縁説明とあった）



第二十一回の多賀大社

第二十回記念大会のスナップ

昭和五十六年十一月七・八日／清風クラブ

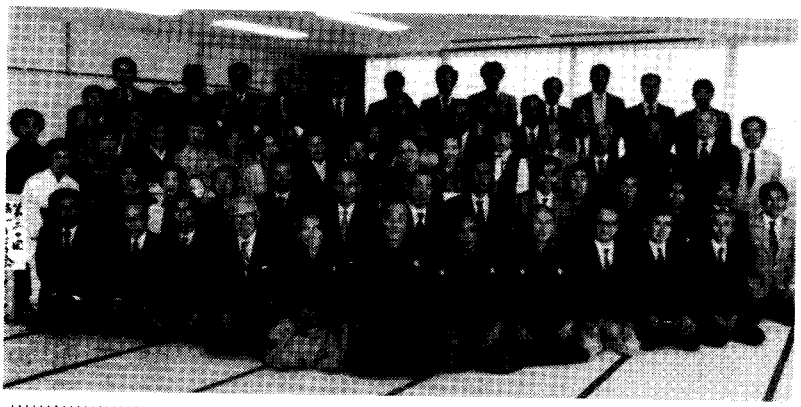
右・舞台の鏡づくりに絵筆を振るう本社絵画部の方々。

中段右・金木犀の記念植樹。

中段左・在京の社員夫人方も「班女」で盛り上げ。

下段右・本社山縣頌子さんの独鼓「笠の段」。

下段左・記念撮影。前列左端はお祝に来られた山本幹三人事部次長（当時。現常務）



第二十二回　昭和五十八年十一月五・六日

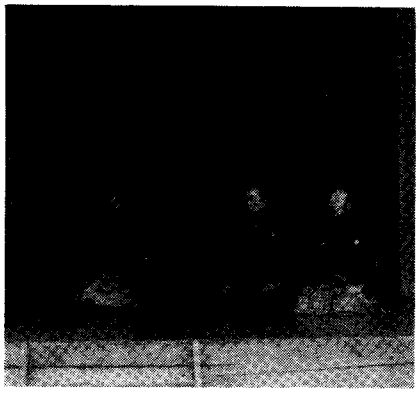
静岡県代表井・醍醐荘

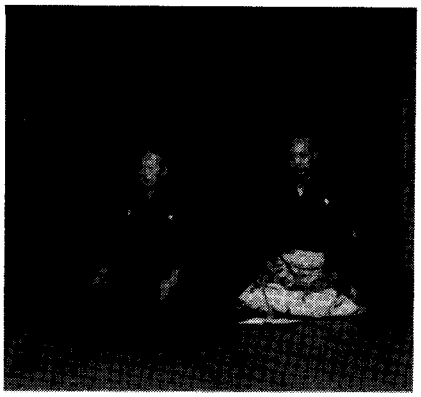
会場は富士工場グループのお世話だった。庭園に舞台があって、低い植え込みと鯉が跳ねる池を隔てた広い縁側が見所になる。ちょっと修善寺の「あさば旅館」に似た感じである。

二日目は小雨となり、舞台の一部が濡れた。小雨を通して見る舞台の謡の声に、目の前の池で鯉の跳ねる音が時折入る。大広間の中の舞台では味わえない、自然の中のうとう会となった。

私事で恐縮だが、第一日の夕食後の申合せをしているとき、家から電話がかかり、義弟か危篤と知らせてきた。もう帰る列車もないので、後の知らせを待つことにした。翌日の朝食のとき死亡の連絡があった。大阪の出し物「源氏供養」が、二番目であったのでそれを謡い大急ぎで帰阪する。（安島注…前夜懇親会に使った大広間が婚礼のために使用できず、打上げはちょっと窮屈な部屋でそそくさと行った。この会場はどのような経緯であったか、四日市の山家さんが事前の交渉にあたった。当時の連絡に「三月二十日、家族旅行を兼ねて、醍醐荘に下見に行ってきました」とある。

なお、後日、醍醐荘から領収書か何かを郵送して来た封筒には「昭和五十八年　国立能楽堂開場記念」の記念切手が貼ってあった。）





故加藤辨三郎会長（五十八年八月十五日逝去）追善。上・観世流の「江口」左から西村・磯部・新井・富岡さん。下・宝生流の「融」左から水原・高橋さん。

第二十三回　昭和五十九年十一月三・四日

静岡県熱海・岩石間荘

会場は、富士工場グループにお世話いただいた。

大阪グループは堺グループと一緒に新大阪八時三八分発の「こだま」に乗った。車中はまるでピクニックにでも出かけるような気分であった。四日市グループは乗用車であったが、連休のため道路が渋滞し約四時間遅れる。そのため番組の順序を次々と変更した。

それに加えて持ち時間をオーバーするグループが続出しためため、進行がかなり遅れた。それを気にした世話役の富士グループ（観世）は、自分たちの素謡を一番抜きたいといいだしたが、何とか抜かないでやりくりした。

夜、部屋で酒を飲みながら安島君と会の進行について議論した、と日記にある。

二日目、母と女房が来て、初めてうとう会を聞く。実は三人でうとう会終了後、熱海荘に泊まり、その翌日靖国神社へ参拝するためであった。

第二十四回 昭和六十年十一月二・三日

兵庫県神戸・須磨荘

今回の会場は、大阪グループがお世話することになり、四月十八日、菊守・八尾君と下見に行く。神戸市営の国民宿舎である。神戸市はなかなか商売気があり、国民宿舎は普通六ヵ月前の受付けであるが、それ以前に受付けてくれた。

参加者は五十名を割ってしまったが、天気は素晴らしく会場から須磨浦や大阪湾が一望できた。

大阪支社の「大佛供養」はそれなりに謡えたが、佐藤武平君がアガッタのは意外。

夜の懇親会で新井会長が、なるべく多く参加してほしい…、と繰り返し要望された。

何人かは朝須磨寺へ行かれた。せっかく来られたのであるから、謡にも縁のある有名な所を見物して帰ってほしかった。もっとも、こちらが用意すべきなのかな？

全員による記念写真は、砂浜に出て撮影した。

（安島注…この回の会計報告の冒頭に「謡うも舞うも須磨の海」と、望月美江さんの祝電を引用している。欠席となった望月さんは「はるかに盛会を祝します」とメッセージを送ってくださった。）

第二十五回 昭和六十一年十一月一・二日

滋賀県長浜・豊公荘

今回の会場は、民営の国民宿舎でやや小さかった。それだけに、ほとんど貸切りのようであった。東京、宇部、防府からの足の便を考えると、新幹線を降りて一時間以内の所を探すことになる。どうしても数は制約される。

琵琶湖の岸辺で白砂青松の面影のある場所であった。

二日目の朝早く散歩に出かけたら、平尾さんが白砂に座り笛を吹いておられた。この夏、ここから約三十分ほど北の木之本へ、私の謡仲間と行き、そして賤ケ岳へ登った。賤ケ岳の上からの琵琶湖の眺めより、この豊公荘の庭からの眺めの方が、白砂と青い松林が続き、前は広い湖、その向こうに比良・比叡の山並みが望め、ずっと琵琶湖らしい風情があったように思う。

大阪の「安宅」を斉藤・瀬島、同山に菊守・上條・佐藤・神田・八尾・私、そして子方に衣輪というメンバーで謡ったが、それから二～三年の間に、謡曲部の五人が東京へ転勤した。

第二十六回 昭和六十二年十一月七・八日

兵庫県相生・あいおい荘

この会場の国民宿舎は、すばらしい眺めの所にある。左に屋島群島、正面に小豆島、右に赤穂岬と東瀬戸内海の眺めが一望できる。

しかし、参加者は当初の申

込み七十五人に対し、実際はなぜか五十八人になってしまった。お世話する事業場として一番ガッカリすることだ。私たちは、下見も当日も大阪から乗用車で行ったものだから、相生駅からそれほど遠いとは思っていなかった。案外距離があったようで、タクシー代が高かったといわれた。これは全くの不覚。すばらしい景色に免じて許していただきたい。

夜の懇親会には、大阪支社からたくさんの「蕪村」を差し入れていただいた。

第二十七回 昭和六十三年十一月五・六日

三重県湯の山・希望荘

第二十四回から三回続けて会場のお世話をしたので、チョット息切れがするし、グループから転勤者がバタバタと出たので、今回は四日市グループにお願いした。

希望荘は三回目であるが、会場設営する立場から考えると、やむを得ない。伊勢神宮の中に舞台があり、借りることができるらしいという情報を伝えたが、宿泊に問題があるという。やはり実績のある希望荘の方がよいのではないかということになった。

会の直前になって、欠席の連絡が何人かからあった。地謡をやりくりしなければならない。仕事の関係など、やむを得ない事情によるものと思うが、そんな苦労もあることを知っておいてほしい。

毎年のように一日目の懇親会のあとは申合せに入る。舞囃子「紅葉狩」の舞アトがコイ合止メか、謡カケかで問題

わが謡曲部の稽古風景

四日市工場謡曲部

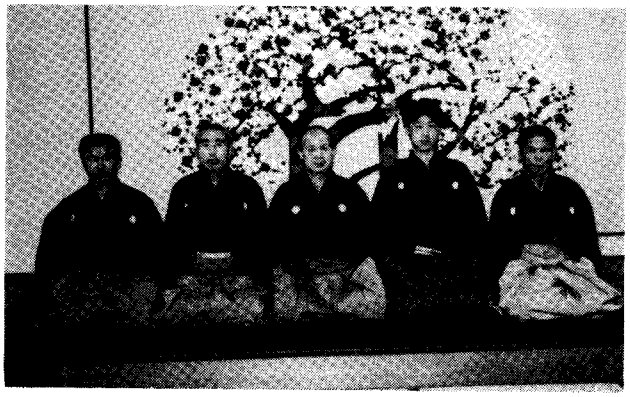
当グループは、四日市地区と名古屋地区に分かれて活動しており春の中謡会、秋の協和うとう会の折には、合同して参加している。

四日市では、工場の山家・上森およびOBの浅井氏が藤波涛光会のメンバーとして、月一回藤波重和師の指導を受けている。

工場内の活動は、年二回の会に向け、山野をはじめとする若手の育成に努めている。

また名古屋ではOBの木谷氏が地域の謡愛好会の世話役をされ、木谷夫人は坂井門下の名誉師範として、名古屋支社の西野氏をはじめ、後進の指導にあたっておられる。

一方、宝生流の寺西氏、OB平尾氏、高山氏らは、それぞれ独自の練習をされ、会に



左から上森・山家さん・藤波先生とご子息・浅井さん

になる。後日、鼓の先生に聞いたら、観世はコイ合止メ、宝生は謡カケだということだった。やはり、私たちは素人の集まりだと感じた。

同じ観世流でも職分家によって多少謡い方が違うことがある。家元系と分家系で、大ノリのハシリが違う。囃子が入ると7拍のモチが違ってくることもあるので、素謡も申合せをした方がよい。しかし時間的なこともあり、そこまでは普通しないが、それだけに地頭の謡によく合わせるように謡う必要がある。

うとう会では、地頭は相当経験のある人にお願いしている。前記のように職分家の所属によって少しは違うところがあっても、その地頭の謡に合わせるように謡うべきである。

ちなみに、うとう会での囃子方の流儀は、笛は森田流・一噌流、小鼓は大倉流・幸流・幸清流、大鼓は葛野流、太鼓は金春流である。

今回は久しぶりに門司工場グループが参加した。そして工場のご好意で清酒雪の花を五本も下げてこられた。

第二十八回 平成元年十一月四・五日

神奈川県大和・大和六瓢能舞台

水原さんの舞台が完成したという情報が入る。「ぜひ、うとう会を」と安島さんに話したら、もちろんそのつもりだということで楽しみになった。

東京に延べ十年ほど住んだが、水原さん宅のある中央林間というところへ行ったことがなかったと思っていたら、相模カントリークラブのすぐ近くだった。

六瓢能舞台は、コリ屋の水原さんが考えられただけに、いろいろなところにその真価がいかんなく表れていた。広さは地謡座の後ろが半間ほど足りないだけで、橋掛かりも三間あり立派なものである。見所の狭いことはやむを得ない。それにもかかわらず、ワキ正にお茶席があり、内前栽まで作ったあった。昭和五十年に、大阪の山手会館という舞台でうとう会を開いたことがある。今も私はよく使っているが、この舞台よりもっともっと本式だった。

ただ、宿泊はどこだろうと思っていたら、「貸切バスで移動しますので、早く乗ってください」ということで、約一時間二十分かかり大和市から隣の相模原市にある国民年金健康保養センター「さがみの」へ移動。

東京に近いということで、二日目は在京のOB社員のご夫人方の参加もあり盛会であった。

打ち上げでは、帰りの新幹線の都合があり途中で席を立たざるを得ないグループもあったが、水原ご夫妻に秘蔵の参加されている。

ほかに、以前活躍されていた四日市の緑氏、水野氏、佐藤氏および木村氏らは、現在休会中であるが、近い将来復帰の予定。

写真は平成三年の藤波涛光会の大会の折、藤波師に協和うとう会三十周年記念誌のお話をして、入っていただいたもの。

日本酒などを振舞っていただき、「内輪の会場ならでは」のうとう会になった。

第二十九回 平成三年十一月十・十一日

奈良県奈良市・相宗大本山 薬師寺

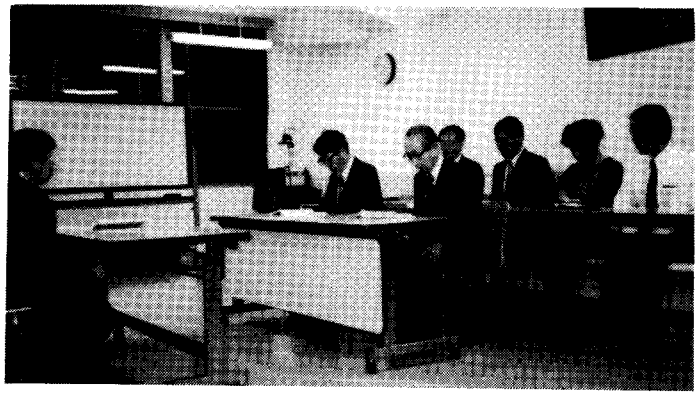
第二十八回は東であったから今年は関西でと思い、彦根の国民宿舎の下見を予定していたら、西野君（現名古屋支社）が、薬師寺が借りられるという話を持ち出した。佐藤君（現東京支社）が「ぜひとも薬師寺でやりましょう」という。安島君に一応電話をする。急遽四月二日薬師寺に、西野・菊守君と三人で行く。ちょうど法要の能があり、担当の僧侶と話せなかったが、事務所の人にいろいろうかがった。この方は大阪支社酒精部長の大隅さんの奥さんと親友で、協和発酵のことをよく知っておられた。

開催日の打合せをする。もお寺ですべて手配してもらえる。お寺としての絶対の条件は、朝五時からの勤行に出た後写経をすることであった。会場になるお堂の借り料はお心任せ、これには弱った。大きなお堂が一軒借り切りである。

二日目朝五時、全員そろって金堂へ行く。東の空が少し明るくなっていた。金堂でのお勤めをして東塔、西塔その他のお堂を礼拝して本坊でお粥の朝食をいただき、写経道場で写経をする。これに近い経験が、第十六回の三井寺だった。

わが謡曲部の稽古風景

本社観世流謡曲部



この日は新年会で、いつものスタイルで「鶴亀」を謡った後、懇親会に入った。

我々謡曲部で現在活動を続けているのは十四名、そのうち協和発酵OBは三名、女性が一名です。そのほか宴会要員は枚挙に暇がありません。

先生は小野葉満子先生。いただいた名刺には、能楽協会会員、坂井同門会同人、坂井職分家室長、観世流能楽師と四つも肩書がついています。平たくいえば坂井音重先生率いる坂井同門会の女流能楽師で、正真正銘のプロです。小野先生には、磯部先生からの引継ぎで昭和四十八年からご指導いただいていますので、もうかれこれ二十年近くになります。

稽古は毎月二回。主に水曜

二日目の打ち上げでは、参加者の数がかなり少なくなっていた。翌十二日が「天皇即位の日」で、会社は休みだからこのを利用してゆっくりすれば、と考えていたが、それぞれに予定の立て方があったらしい。

次回は第三十回の記念大会なので、初めて防府で開催すること、記念行事として二十回記念と同程度のものを考えること、などを確認して散会した。

第三十回記念大会　平成三年十一月九・十日

山口県防府市・渡辺舞台

第二十回記念大会が、協和発酵発祥の地である「清風クラブ」であったから、第三十回はぜひとも「防府」でとなったが、会場探しにはいろいろ苦労があった。

当初、安芸の宮島「厳島神社」の能舞台が借りられるかも知れないということで、防府工場の木野君に現地調査を依頼したところ、舞台は奉納する形で一日は借りることは可能だが、二日間の連続使用は困難などの問題があって断念した。工場内の「有鄰館」も候補に上がったが、市内の「渡辺舞台」に落ち着いた。第二十八回の六瓢能舞台の時と同様、宿舎の条件が大宴会ができて、音合わせなど前夜の申合せができ、舞台から近い所とあって、防府の原田幹事を悩ました。結局、送迎バスで二十分の「玉泉湖温泉」に決まった。

何しろ防府はもとより、山口・中国地区で初めてのうとう会開催ということで、たく日の十八時頃から二十時頃まで、写真にもあるとおり、会議室のテーブルを前に椅子に坐り学校の教室スタイルで行います。この写真は、平成四年の新年会前に「鶴亀」を謡っているところです。通常出席する人は、平均五～六人程度。三つのコースに分かれており、初級コースから始め中級、上級コースとなります。一曲を普通三～四回で仕上げるので、年間六曲程度習うことになりますが、交謡会（関東地区大会）やうとう会の前にはおさらいを数回しますので、実際は年間の曲数はもっと少ないかもしれません。とにかく、焦らず着実に、をモットーで教えていただいています。

会社の謡曲部とはいえ、観世一門としての自覚を持つため、昭和五十九年に九名の部員が観世流家元に入門させていただきました。今年の新年会では、さらにその上の習いものに進みたい人が名乗りを上げ、頼もしい限りです。

坂井同門会では、年に4回の同門会を観世能楽堂で開催しますので、プロの芸に直接触れる機会に恵まれており、非常に幸せなことです。

また、平成元年六月には、小野先生がプロとして立たれてから二十年を記念して「観葉会」を国立能楽堂の本舞台で開催され、出演の機会が与えられました。非常に名誉なことでした。

小野先生を師と仰いで、今後とも謡の道に精進していければ、と願っています。

（平成四年二月　野村記）

記念大会のお祝にお越しいただいた元防府工場謡曲部の左から坂本・関・柳さんと渡辺舞台の渡辺さん

さんおられる防府工場謡曲部OBへのお誘いもしっかりお願いした。そして懐かしい方々に多数お越しいただいた。

舞台の上では、宇部工場から宝生グループが初参加、うとう会の新人といわれる若い人の仕舞や舞囃子への挑戦などがあり、協和うとう会の次の発展を示唆しているようであった。

一日目夜の申合せで内田さんにアドバイスする磯部さん

一日目の夜の舞台、つまり懇親会は、三十周年記念誌の取材を兼ねた「わたしの謡一徳」を出席者全員にお話していただいた。宴会の後は、例年にない熱のこもった申合せと「部屋別懇親会」が遅くまで続いた。

宇部グループに同行して、面打ちの松田重久さん（千代田開発）に、その作品数点とともに二日間お付き合いいただいた。

第二日の最終は、追加番組として、故加藤幹夫社長追善の「融」を全員で謡った。

（この回は安島担当）

おわりに

こうして綴ってきたものを読み返してみると、謡のことを何も書いてありません。

私は「協和うとう会」は、協和の社員、OBそして家族で謡を趣味とする人々が年一回集まり「やーやー」といって、この一年勉強してきた成果を発表しあい、共に謡を楽しむものだと思います。

そして、新しい仲間を温かく歓迎して、その人が謡を趣味として長く楽しめるように励ますことだと思います。ですから、うとう会の当日、会場から抜け出して他の部屋で自分たちの稽古をしておきたい気持ちもわかりますが、出演者の謡をできるだけ聞いてあげることも大切ではないか思います。

その日の出来不出来は本人が一番わかります。自分なりに良く出来た時は、何となく満足感を覚えるものです。

最後に、私の師匠であった故大西信久師の残された「謡十五徳」をご紹介します。

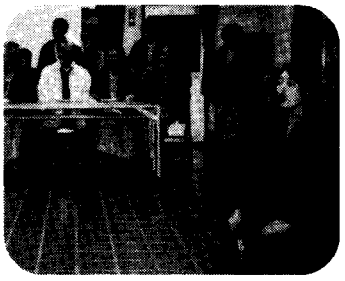
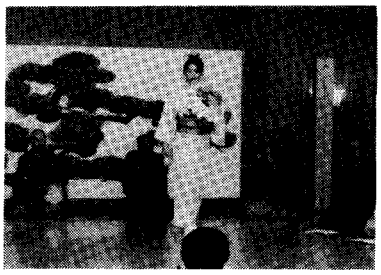
謡十五徳

不行而知名處
在旅而得知者
不習而識歌道
不詠而望花月
無友而慰閑居
無楽而散鬱気
不思而昇座上
不望而交高位
不老而知古事
不恋而懐美人
不馴而近武芸
不軍而識戦場
不祈而得神徳
不觸而知佛道
不厳而嗜形美

第三十回記念大会スナップ

一日目の懇親会の後は恒例の申合せ。**左二列の四段は**、二日目の本番と前夜の申合せ風景。上から「班女」望月・「玉鬘」木谷・「船弁慶」内田・「草子洗小町」松岡さん

四段目右は四日市「浮舟」役は右から木谷・浅井さん。**五段目右から**「高砂」浅原・「松風」花田・「船弁慶」若月さん。**最下段の右は**初参加宇部宝生の右から村上・昼田さんと平尾さんの「小督」。**同左**はこの年の八月二日に逝去された故加藤幹夫社長追善の「融」を全員で謡った。

小屋主奮戦記

水原　一瓢

「謡」というものを始めてから四十八年になりますが、良師のお陰により巨象のような能楽のほんの一部を伺い知ることができましたた。旧制高校の理乙から農学（ノーガク）部へ行った男が能楽（ノーガク）師になって舞台を作ったというのは聞いたことがないので、変わり者として愚文を呈します。

指稽古・運動靴稽古

始発駅で数台やり過ごして何とか座席を確保した男。膝の鞄の上に両手を乗せ、何やらブツブツ言いながら左右の人差指で仕舞の稽古。隣の美人がけげんそうに覗き込んでも、全くお構いなし。「廻返シ」や「小廻リ」など回転するものは指がからまって肩が凝りますが、仕舞の型の表現はほとんど可能で、地拍子や鼓の粒（つぶ）などは、本来お手のもの。鞄という舞台の上では、指に勝るものなしです。

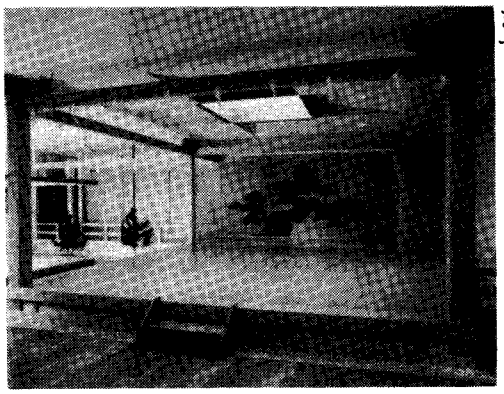
殺人的な満員電車の中ではようやくありついた吊り革が舞台。すぐに指が動き始め、ブツブツと独り言が始まります。時には「ウルセー」といった感じでにらみつける奴がいるので、口の開閉だけで謡う技術を身につけ人畜無害になったはずですが、今度は逆に精神異常者と思われたかもしれません。謡に割ける時間は、このような通勤電車の中の一日二、三時間のみというのが若い頃の状況でした。

舞囃子「山姥」を舞う水原さん。囃子は右から高橋・富岡・近藤さん

皆さんご存じの世田谷・野沢寮にいた頃の話ですが、玄関を入ったところの半間の廊下は、真っ直ぐの「運び」とそれにつながる二、三の型までが限度。そこから六畳の居間に飛び込むわけですが家具を壁に寄せつけても残りの空間は狭く、激しい型では机の角に頭をぶつけたり扇を破ったりすることも再三。能の稽古が始まった頃には、このような割り稽古では何とも致し方のない感じでした。

巨人・長島の家のある世田谷・野沢には小さな公園が点々とあり、これを順に回って散歩したものですが、その中の一つに、かなりの大木がほぼ正方形に四本立っており、歩測してみると約三間。コレダ！と飛び上がりましたが、その時の歓喜は今でも忘れません。直ちにその夜の十一時頃にいそいそとこの公園に出掛け、テープレコーダーからの下手な自分の謡に合わせ、運動靴で砂利をザラザラ分けながら舞の稽古と相成った次第。どんなに大きく廻しても扇は何物にも当たらず、型を

終わりまで連続して繋げられる有難さと快感は何とも素晴らしいものでした。ただ運動靴を隔てた足の裏の感触が悪いのと、ジャリジャリと音のするのが玉に傷。人気の全くない十二時近い夜の公園で、お経のような文句に合わせて踊っている男は確かに尋常ではないので、巡査から二度ほど職務質問のように話しかけられたのが思い出になっています。



水原さんの大和六瓢能舞台

便所の前から出る能の稽古

小田急江ノ島線の中央林間あたりには、敗戦で厚木に降りた米軍将校のハウスが、相当数建てられたそうですが、「三十坪の平屋で、その半分の三十畳は板の間だ」という情報を聞きつけ、野沢からすっ飛んで行きました。夕暮近い林の中、荒れた山小屋のような家の窓から覗き込んでみると、手斧（ちょうな）で削ったくもの巣だらけの梁の下に、四角の広い板の間がぼんやりと見えました。あたりは木が多過ぎて湿度が意外に高いこと、石の大きな寝棺のような形の風呂は冷えて困ること、子供の学校のことなど、すべてそっちのけで、エイヤッと引越を決めてしまったのは今思えば無茶な話でした。昭和四十八年頃のことです。

さて、このぼろ家にも予想どおり素晴らしいことがありました。三十坪の半分は台所・風呂場・便所・居間など、残りの十五坪（三十畳）は何もないほぼ正方形の板の間、その床の上に白い絶縁テープで三間の四角を作り、近くで拾ってきた丸太の一メートルほどに切ったのを四つの角に立て、柱間隔三間の正規の舞台に見立てたのです。便所の前に立って『お幕！』「橋掛り」のつもりで約十歩ほど歩いて、このテープの舞台に入ることができるのです。

羽衣・猩々・船弁慶・紅葉狩・砧・景清・大原御幸などのアシライワキから入り綾鼓・望月など二十数番の能は、みなこの「特設舞台」の臭い便所の前から生産されたことになります。

舞台造り

さてこの家、林の中の一戸建てで山小屋風の造りに惚れていたのですが、建築後四十年ということで傷みが激しくなってきていたので、渋々、建て替えを決意しました。

ついては、年来の「三間四方の板の間への恋」を成就すべく、どさ回りの都度、地方の古い舞台の調査を始め、三年ほどは資料をまとめたり、図を書いたりして楽しみました。約百坪の敷地の中に、二階は住居区、一階は本格能舞台専用という構造。約二年をかけて平成元年二月十一日の舞台披きに漕ぎ着けたのでした。

能の稽古のため各部分に工夫を凝らしましたが、余りに専門的にわたるのでここでは略します。あれこれ工夫しているうちに、舞台空間内の残響時間一・八秒という良好なデータが得られ、『謡うのも鼓を打つのも楽な舞台』という評価を受けました。

小屋主一年生

舞台披きのすぐあと、近くの地方新聞がやってきて「呼び屋をやらせよ」という。この舞台を人に貸すなどということは考えてもいませんでしたが、各種の邦楽や洋楽に開放するのも地元への寄与と思い「エエヨ」とOKしたところ、初めに呼んできたのが落語。全く予期していなかったので一瞬ウーンと唸りましたが、やってみるか、と思ったのが失敗のもと。

この師匠、国会議員だったこともあり何かと問題がありますが、それでも芸人・役者の類ですから常識はあるだろうと、何も言わなかったのが大誤算。脂（あぶら）足の靴下のままで白木の舞台の上をペタペタ。正面の貴人（きにん）席でタバコをプカプカ。「たがや」という古典落語で契約したのに、いざ始まると「カクエイが、ナカソネが……」と政治談義。見兼ねた彼の事務所の人が「たがや」と書いた紙をちらちら見せてようやく気がつき、お座なりに十分ぐらいでおしまい。地元に対する初めての舞台披めなので、大勢の客の前で「フザケルナ！」と怒鳴るわけにもいかず、憤まんやる方ない一夕でした。

客は能舞台ということで、ほとんどの男性はネクタイをつけてきたくらいなので、この与太った演者との対比は、まさに『落語』でした。それより一番の損害は、左手でゲンコツを作って戸をたたく仕草、右は扇の要（かなめ）で床をトントンやる例の「コンバンワ！」。桧の板にかなり深くついた二十個ほどの鳥の足跡のような傷は一生？消えないと思います。

落語はこれですっかり懲りましたので一切ストップ。その後、頼まれて琵琶・三絃・尺八・朗読・日舞などの邦楽や、室内音楽・古楽器演奏・コーラスなど各種洋楽の演奏会を開いて、『柔らかでいい音』という好評をもらいましたが、やはり「板は命」という我々のとは舞台に対する考え方が違うようで、現在では能楽関係者のみということにしています。

舞台表面の滑り具合の調整は、曲柄によっては死命を制するので、この技術の開発も小屋主の苦労したところ。

おわりに

謡を始めて四十八年。良師にめぐり合ったことにより、二十四曲ほどの能をさせてもらいました。舞台造りは、普通のサラリーマンの成れの果て、年金男としては無茶だと友人に言われましたが、『三間の板間』への憧憬もだしがたく「これからもっと能を……」という一心からの仕事でした。

舞台が完成した年の協和うとう会は、ここを使っていただきました。

これからぽつぽつ能を……という時に、九十歳というお年のこともあって師が引退され、二階に上がったら梯子がなくなったようで暗然としました。しかし現在は、拍子の問題など科学的な手法も加えて、後進を育てることに情熱を燃やしています。

能舞台の構造・機能や水琴窟などに興味をお持ちの方は遠慮なくご検分かたがたお立ち寄りください。

（平四・七記。本社OB・能楽協会会員・宝生流職分）

勤め人と趣味

西村　淳

勤め人とはわれわれサラリーマンであり、趣味とは謡曲関連と解釈してもらいたい。

趣味とは概ね面白いものであるが、それは余技であるが故に楽しいものであって、それを職業とする人には歴史のある伝統芸能で、ある程度辛いものであろう。換言すれば仕事の報酬によって生計を維持し、その仕事のプロであるからこそ、厳しい精神状態と時間的制約があるのであり、これはどの世界でも同様であって、当然のことである。

このような前置きで、表題についていささか所見をみたい。一つの雛型として、自らの人生と謡曲の関わりを年表風に略記し、ご参考に供したい。

昭24ころ　友人に誘われ始める。素人の先生。

昭26・4　協和入社。富士工場配属。富岡さんと共に三島市で田所利朗師につく。謡曲、仕舞。

昭27・4　防府転勤。社内で当時の新井技術部長、社外で津田康由師（謡、仕舞）片山希知師（小鼓幸流、新井・富岡さんは葛流太鼓）市内の指導者町田さんに地拍子を教わる。

昭32・12　富士転勤。中断。

昭39・1　防府転勤。

昭41・1　本社転勤。

昭49～50　大病により一年間入院、休職。

舞囃子「花月」を舞う西村さん（第二十八回うとう会・大和六瓢能舞台）

昭51・1　復職。秋から本社謡曲部で謡再開。（約二十年中断）

昭52～53　自宅のある四街道市に同好会結成。

昭56　鈴木一雄・西山幸助師に師事。謡、仕舞。

昭57　瀬尾乃武師に師事（葛野流太鼓）

昭58　名誉師範允許。

昭59　淡謡会主宰。協和発酵退職→現在の会社へ。

平2・5　一噌幸政師に師事（一噌流笛）

〈予定〉

平6～7　太鼓開始。

平40（二〇二八）　百歳にてあの世へ。

振り返ってみると、比較的熱中した若いころの富士・防府時代、仕事・家庭の重圧のため趣味を続行するゆとりが持てず中断した二十年間、大病が辛くも癒えて社会復帰ができて以降現在まで、の三つの大きなうねりがあった。大病とは過労による脊椎カリエスで、ギプスベッドの中で身動きもできない長期の療養であったが、いろいろと自分の生き方について、反省する時間を持てたことは幸いであった。中断当時の私は、いわゆる仕事人間であり、ワーカーホリック的な生活で前へ突進

するのみであったが、病気を転機として、心と生活にゆとりを、そのためには中断していた謡を再開し、中国文人のいう「聊（いささ）か以て自ら楽しむ」生活をしたいと思うようになった。

再開後は、稽古はもちろん夜の時間が主となるが、その他は通勤の電車の中で、本やテープ、ビデオの類を繰り返し読んだり聞いたり、仕舞も頭に思い浮かべて復習した。大半の素人と同様、仕事で疲れて帰ってから稽古することはまずなく、せいぜい会の前に泥縄式に復習する程度であるから、電車の中は貴重な時間である。

勤めをやめて玄人になられる人や、東大の学生でもクラブ活動が高じて、玄人の狂言師や囃子方（笛）に転進する者もあるようであるが、これはまず例外である。勤め人はまず自分の仕事にプロであることが優先するし、趣味に淫することは古人の戒めどおり心すべきである。余暇を上手に使って趣味を十分楽しめる境地まで押し上げるには、多少の努力が必要であるが、仕事の苦労に比べれば僅かなものである。

何の趣味でも初めから楽しいものは底が浅く、深いものほど初めはわからないし、苦労するものである。いずれの場合でもその成果やレベルが一定の閾値（いきち）に達するまでは、かなり集中と努力そしてある程度の投資（月謝や参考資料等）が必要であるし、その後の進歩も速やかで新しい展望も開けてくる。さらに、一定以上のレベルに達すれば、自然に他のグループからの勧誘もあり、交友関係も広まって楽しい。

仕事や家庭の重圧のため、やむを得ず中断をするのは仕方のないことであるが、再生できる播種がされておれば、またの機会に再び芽生え、育て上げることもできよう。勤め人は、好むと好まざるにかかわらず、年月の経過とともに現役から予備役となり退任に至るが、反面、自由になる時間が増してくる。謡曲関係の趣味は、幅広く奥深いものであるから、コツコツやっておれば時間を持て余すことはない。

「継続は力なり」とも「継続は文化なり」ともいわれるが、灯を絶やすことなく、また絶えぬと見極めがつけば良師について（団体稽古では限界がある）、謡の他に舞、地拍子、囃子の勉強と進め、その醍醐味を共に味わいたいものである。

（本社ＯＢ）

カット・高橋孝夫さん（富士工場グループ）

資料・協和うとう会30回の記録

回	開催年月日	会　場	参加人員	メ　モ
1	S 35. 7.17	熱海・健保熱海荘	21	観世・宝生合同謡会
2	S 36. 8.20	修善寺・あさば旅館	17	本社・東研・富士
3	S 37. 6.17	熱海・健保熱海荘	25	
4	S 38. 6.23	熱海・健保熱海荘	25	
5	S 40.10.31	熱海・健保熱海荘	35	
6	S 41.11.20	熱海・つるやホテル	39	
7	S 43.10.20	四日市倉庫湯の山保養所	28	
8	S 44.11.13	網代・協和網代荘	35	
9	S 45.10.18	三島・佐野別邸	50	
10	S 46.10.24	浜松・西遠荘	60	
11	S 47. 9.17	三島玉沢・妙法華寺	72	
12	S 48. 9.15・16	浜松・奥山半僧坊	64	
13	S 49.10.19・20	浜松・館山寺荘	74	
14	S 50.10.18・19	大阪吹田・山手会館	84	南区・ﾆｭｰﾅﾆﾜﾎﾃﾙ宿泊
15	S 51.11.6・7	湯の山・希望荘	90	
16	S 52.11. 5・6	滋賀三井寺・法泉院	87	
17	S 53.11. 4・5	三重湯の山・希望荘	81	
18	S 54.10.20・21	竜野市・赤とんぼ荘	77	
19	S 55.11. 1・2	静岡袋井・可睡斉	84	
20	S 56.11. 7・8	東京東北沢・清風クラブ	96	世田谷・晴光園宿泊
21	S 57.10.16・17	滋賀・多賀大社参集殿	70	
22	S 58.11. 5・6	静岡袋井・醍醐荘	80	
23	S 59.11. 3・4	静岡熱海・岩間荘	73	
24	S 60.11. 2・3	兵庫神戸・須磨荘	60	
25	S 61.11. 1・2	滋賀長浜・豊公荘	49	
26	S 62.11. 7・8	兵庫相生・あいおい荘	60	
27	S 63.11. 5・6	三重湯の山・希望荘	69	
28	H元.11. 4・5	大和市・大和六瓢能舞台	90	相模原市・さがみの宿泊
29	H 2.11.10・11	奈良・薬師寺	80	
30	H 3.11. 9・10	山口防府・渡辺舞台	74	防府市・玉泉湖温泉宿泊

資料・協和うとう会第１回～３０回の素謡の上演曲目と回数　（５０音順）

曲　目	計	~9回	~19	~30	曲　目	計	~9回	~19	~30
阿　漕	5	1	4		玄　象	5	1	2	1
安達原	5	1	2	2	小袖曽我	9	3	5	1
葵　上	10	2	5	3	小　督	18	3	8	7
敦　盛	4		1	3	小鍛冶	4	1	2	1
芦　刈	2		1	1	胡　蝶	1	1		
安　宅	3		2	1	桜　川	1			1
嵐　山	3		2	1	實　盛	1			1
綾　鼓	1			1	七騎落	2		2	
岩手山	1		1		猩　々	4	1	1	2
井　筒	6	2	2	2	正　尊	6		5	1
鵜　飼	8	1	3	4	俊成忠度	2		1	1
浮　舟	1			1	春　栄	2		1	1
雨　月	1			1	俊　寛	8	3	3	2
善知鳥	4		1	3	昭　君	1		1	
雲林院	1			1	隅田川	3		2	1
江　口	1			1	住吉詣	1		1	
烏帽子折	2			2	千　手	5		3	2
大原御幸	2		1	1	蟬　丸	10	3	5	2
女郎花	1			1	殺生石	1		1	
鉄　輪	3		1	2	草子洗小町	8	1	5	2
景　清	4	1	2	1	忠　度	2	1	1	
花　月	1			1	田　村	2	1	1	
通小町	9	2	4	3	高　砂	1			1
咸陽宮	4	1	1	2	大佛供養	9	1	3	5
葛　城	1			1	竹生島	4	1	1	2
神　歌	1			1	鶴　亀	11	5	3	3
加　茂	9	4	3	2	土蜘蛛	13	4	3	6
邯　鄲	2			2	経　政	5	1	2	2
杜　若	3		1	2	道成寺	3	1	1	1
清　経	5		3	2	巴	1			1
砧	1			1	天　鼓	1	1		
鞍馬天狗	6		3	3	朝　長	1		1	
国　栖	1			1	鳥追舟	1		1	
黒　塚	1	1			野　宮	3			3
源氏供養	1			1	難　波	2		1	1

曲　目	計	~9回	~19	~30	曲　目	計	~9回	~19	~30
橋弁慶	8	2	4	2	盛久	1			1
羽衣	5		2	3	三井寺	9	3	3	3
半蔀	1			1	三山	1		1	
班女	10	5	2	3	三輪	2	1	1	
鉢木	2		1	1	和布刈	2		1	1
花筐	5		3	2	紅葉狩	16	5	7	4
雲雀山	4	1	2	1	望月	3	1	2	
藤戸	6	2	2	2	屋島	3		2	1
船弁慶	11		7	4	山姥	1			1
二人静	2		1	1	熊野	4	1	2	1
富士太鼓	7	2	2	3	夕顔	1			1
放下僧	3		1	2	吉野天人	2		1	1
枕慈童	1		1		養老	1			1
卷絹	2		1	1	夜討曽我	1		1	
松風	6		3	3	楊貴妃	1			1
通盛	2		1	1					

（注）宝生流の「八島」「草紙洗」などは観世流の曲目で処理した。

1．全　曲　数　101曲（200曲中のちょうど半分）

2．延べ曲数　387曲

3．上演回数別（回数の多い順）

上演回数	曲数	上演回数	曲数	上演回数	曲数	上演回数	曲数
18	1	10	3	6	5	2	17
16	1	9	5	5	8	1	34
13	1	8	4	4	9		
11	2	7	1	3	10	計	101

4．ベスト5　①　18回　小督

②　16回　紅葉狩

③　13回　土蜘蛛

④　11回　鶴亀・船弁慶

⑤　10回　葵上・蟬丸・班女

なるほどと思う曲がよく謡われています。